

令和6年度学校評価計画書（最終）

学校名（宮内小学校）

評価計画					自己評価					学校運営協議会 委員評価コメント	改善方策
中期経営目標 (めざす児童生徒像)	短期経営目標 (めざす児童生徒像)	目標達成のための方策	評価項目・指標	目標値	中間 8月	最終 2月	達成度	評 価	結果と課題の分析		
確かな学力の定着 (自ら学び合う子)	各教科等の目標を達成するための学びを定着させる	<ul style="list-style-type: none"> <li>全ての単元で目標にもとづいた評価を行う。</li> <li>特別支援教育の考え方を生かした個別最適な学びを提供する。</li> <li>体育の授業改善を進める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学びが楽しいと捉える児童の割合（アンケート）</li> <li>適切に振り返る力の向上を自覚する児童の割合（アンケート）</li> <li>【校区共通項目】</li> <li>授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいると捉える児童生徒の割合（全国児童生徒質問紙）</li> <li>【市共通項目】</li> <li>新体カテストで①立ち幅跳び、②シャトルランの県平均を上回る。</li> </ul>	100% 80% 95% ①80% ②80%	90% 85% 83% ①72% ②46%	90% 89% 92% ①46% ②44%	90% 100% 97% 58% 55%	B A B D	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業が楽しいという児童の肯定的評価が91%と高い。また、「子どもたちにわかりやすい授業を行っている」という保護者の肯定的評価も89%から91%と向上した。今年取り組む研究のテーマを絞って全体に広め、共通認識のもと授業改善を学校全体で進めていくことができた。新しい取組として、ふりかえりのルーブリック作成に取り組み、全校で共通した具体的な視点を示した。その結果、児童と教師の双方の目指す姿が明確になり、振り返りの連続を通して主体的に学ぶ児童の育成に貢献した。</li> <li>学年部と特別支援教育部で協働して児童のアセスメントを行うことで、どの児童も主体的に学習に参加できる支援の方法や教材等を考えることができた。特別支援学校のセンター的機能を活用し、専門的な意見を取り入れ、適切なアセスメントができた。</li> <li>2回の結果を比較し、シャトルランの結果はあまり変化がないが、立ち幅跳びの結果は大きく下がった。持久力を高める運動は、運動会や長縄大会、持久走などの機会があったが、跳躍力を高める運動が意図的に設定できていなかったためだと考えられる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教師の言語活動が学級の雰囲気を作る。説明・指示のような言語だけでなく、子どもの発言を促す、興味関心をもてるような発問を精選するとよい。</li> <li>授業の様子から、自分で考えて自分で学ぶという姿勢を大切にしていることがうかがわれた。指示されたことだけでなく、自分で考えて行動する力はこれから必要な力だと感じた。</li> <li>学習を進める際に動作化を取り入れるなど、活動と合わせることで理解が深まると感じた。</li> <li>特別支援学級の環境づくりやその考え方は、通常の学級においても取り入れていくとよいと感じた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>単元でつけたい力を明確にし、児童をゴールを共有することに引き続き取り組んでいく。</li> <li>振り返りの視点を焦点化し、児童に適切なタイミングでの評価を継続して行っていく。</li> <li>引き続き、日常的に通常学級と特別支援学級、それぞれで作成した教材を共有し、学びの選択肢を増やししていく。</li> <li>授業の準備運動や休憩時間などに取り入れられる運動を改めて整理・発信し、効果を検証していく。</li> </ul>
自律と協働の力の育成 (心豊かな子)	学校の中で一人一人が認められ活躍できる場を増やす。	<ul style="list-style-type: none"> <li>PBSの日常的な実践</li> <li>特別活動を計画的に実施する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分にはよいところがあると捉える児童の割合。（アンケート）</li> <li>【校区共通項目】</li> <li>各学級から議題を代表委員会に提出し、話し合う数。</li> </ul>	90% 90%	87% 33%	84% 90%	93% 100%	B A	<ul style="list-style-type: none"> <li>「自分にはよいところがある」と捉える児童の割合達成度が93%。学級裁量の時間に取り組める自己肯定感を上げるアクティビティを月1回提案していることが効果を上げたと考ええる。また、各委員会で、児童自ら学校生活をよりよくするための取組を考えて実行していることや、各学級でのよい取組を交流すること（よかったこと見つけ等）も児童の自己肯定感向上につながったと考える。</li> <li>代表委員会で各学級からの意見が活発に出せるように、代表委員会用のクラスルームを作った。そのことで、他の学級がどのように代表委員会に提案しているかがわかりやすくなり、各学級からの提案が増えることにつながった。夏休み</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分のよさを知る、ありのままでも自分でも大丈夫といった自己肯定感を育むことは保育園でも大切にしている。主体的に学びに向かう原動力になるということを参観して改めて感じた。</li> <li>自治意識を醸成するために、自分達の意見が学校生活に反映されたという実感をもてるような活動を行う。</li> </ul>	

										に話し合い活動の研修を行ったことも効果があったと考える。		
地域、保護者から信頼される学校	・情報発信の仕組みを整える	・総合的な学習の時間を中心に、児童が地域と関わる場をつくる  ・学校の教育活動の発信をHP、通信で計画的に行う	・総合的な学習等で全学年が地域の方と関わり合い学ぶ機会をつくる  ・本校の取組への満足度。(アンケート)	100%	67%	83%	83%	B	・総合的な学習の時間などで、地域との関わりを通して学習を深めることができた学年は83%であった。当初考えていた計画と児童から出た意見が違っており、地域との関わりをもてない学年があった。 ・宮内小日記を更新し、日々の教育活動の様子を伝えることで、タイムリーな児童の様子や学校の取組を発信することができた。今年度より学校からの通知をメール配信したことで、直接保護者の手元に情報が届く機会が増えた。	・地域は学校に協力したい、学校も地域に協力を求めているという関係だと理解している。今後は、さらに情報の共有を緊密にし、地域として、学校の力になりたいと思っている。	・各学年で計画を見直し、来年度は計画的に地域との関わりを通して自分と社会とのつながりを感じられる学習を仕組んでいく。	
職員の充実感を高める。	◎分掌の見なおしと運営参画の機会を増やす。	・児童重点とつけた力の重点化により業務の軽重を職員が判断する機会をつくる。	・業務改善が進み、働きがいがあると捉える職員の割合(アンケート)	90%	83%	81%	92%	B	・行事予定の周知の方法を各部署で工夫し、各自が業務内容の優先度を調整しながら計画的に業務を遂行するようになり、業務改善に主体的に関わっているという意識の高まりも見られた。一方、子どもと向き合う時間の充実感は46%と低い。	・授業などで直接的に関わる時間だけが子どもと向き合う時間ではない。先生方の全ての業務は、子どもと向き合う内容である。その中でも、子どもの学びを評価するためのテストの丸付けやノートの確認は、授業と子どもと真剣に向き合うため必要だと感がある。	・校務分掌の平準化と重点化について検討していく。	

「達成度」＝報告期の達成値／目標値 「評価」＝目標値に対する評価の割合 (A:100%、B:80%以上、C:60%以上、D:60%未満)